ジヤワの道路及自動車

清野謙六郎

はしがき

舊蘭印は衆知の如く、ジヤワ、スマトラ、ボルネオ、セレベス等が主な島で、人口は約六千萬を數へるが、その中五千萬人と云ふものは、面積から云つて舊蘭印の僅か七％にしか當らないジヤワにかたまつてゐる。(ジヤワの面積は約十三萬方粁で、我本州の半分位にしか當らない)。

從つて人口の稠密な事は驚くべきで、一方粁に對し三一六人に當り、日本内地の一八一人に比較しても、如何に人口が稠密であるかが判る。

斯樣に人口の點のみでなく、政治的にも、經濟的にも、文化的にもジヤワは斷然舊蘭印の中心をなしてゐたのであつて、丁度オランダは、蘭印がオランダの植民地であると同樣に、ジヤワを本國とし、スマトラ、ボルネオ、セレベス等をジヤワの植民地と云つた樣に統治して來たのである。

從つて、交通の發達も舊蘭印の中でずば抜けて居り、殊に道路交通の發達せる點に於ては南方占領地中第一位であると稱せられてゐる。

道路事情

ジヤワに於ける道路の發達は比較的早く、約三十年前に既に根本的な道路建設計畫が樹立され、自動車の發達と共に整備されたもので、現在ジヤワの西端から東南端バリー海峽に至る縱貫道路と、之より南北の主要都市を結ぶ道路が建設されて居り、その延長は二萬六千五百粁に及び山間僻地に至るまで鋪裝道路の通ぜざる處はなく、道路の優秀なる事はジヤワ訪問者の口を揃へて語る處である。

戰前の道路の模樣に就ては作家高見順氏が次の樣な興味深い感

標を述べてゐる。

「……ジャワの全島を、完全に近い自動車道路が縱に貫通してゐて、どこへでも自動車で旅行できる。野暮な汽車なんかより、自動車の方がずゝと氣持ちがいゝから、氣のきいた人はみな自動車で旅行する。私たちも、――私たちは、行くさきざきで在留邦人の一方ならぬ世話になつたものだが、その所有の車に乘せて貰つて、普通まあ、時速八十粁の快速を味はふことができた。（中略）

ドライブ、ウェイも、道の兩側には大概南洋特有のペラ棒に大きな並木が植ゑてあるが、道がカーブしてゐるところでは、その並木の根元が白いペンキでずつと塗つてある。夜は自動車が特に凄いスピードで走つてゐるのだから、街路樹に衝突する危險を防ぐため、さうした注意が施してあるのだ。街路樹の無いところには白いペンキを塗つた石が並べてある。

道路の良さに感心するついでに、そんな入念な注意にも感心したが、街にこれまた入念で親切な、いろいろな交通標示柱が立つてゐるのにも感心した。たとへば、赤い圓形のなかを白く拔いたところに自動車の正面の繪が描いてある標示柱は、この道自動車通るべからず、といふことを現してゐるのだ。さうした赤の輪は禁止のしるしで青は許可のしるし。青地に白で人が自轉車に乘つてゐる繪を描いてあるのは、この道自轉車で通行してもよろしの意、自轉車のほか人の歩いてゐる繪、馬に乘つてゐる繪、それから自動車、馬車、牛車、手押車等いろいろある。禁止の赤の方も同樣いろいろある。赤い輪の中に黑くPを描いてあつて、其Pの字を斜めに赤線で消してあるのは、こゝで駐車してはいけないといふしるし。Sの字が同樣に消してあるのは、ストップ禁止。病院の前には、きつとラッパの繪を赤線で消したのが立てゝある。こゝで自動車のラッパを鳴らしてはいけないといふ注意。家に病人ができたとき警察に頼むと、このラッパ禁止の標示柱を家の前に立てゝくれる。かくて病人の安眠を守ることができる。感心な制度である。かうした標示が――一體どの位あるのかと思つて、とある運轉手に交通規則の本を借りて見たところ、四十一種類あるのだつた。

多くは繪で示してあるのが面白い。土民の殆どが字が讀めないのでその土民にも分るやうにといふ親心、まことに親切なものである。と、はじめはその親切に感心したが、よく考へてみると、ほんとうの親切といふものは、土民の無智蒙昧をそのまゝ『尊重』して、字の讀めないやうな無教育狀態にいつまでも突き落しておくことより、字の讀めるやうな文化的な高さに土民の一般を高めることの方にあるのではないか。だが思へば、和蘭の植民政策の成功は一にこの『親心』に據つてゐるやうである。以下略。

（昭和十六年六月號「改造」掲載、「蘭印の印象」より）

斯樣に、多くの人が讃へる優秀な道路施設も一皮むけば、陰險

惡辣なオランダの植民政策の現はれの一つと見る事が出來やう。

又、素晴しい自動車道路も、原住民の福祉のためではなく、オランダ人が自家用自動車をぶつとばすための道路であつたと云へやう。

かのジヤワの西端より東南端バリー海峽に至る延長八百哩の大縱貫道路を初め、國道の殆ど總ては賦役卽ち原住民の血と汗の結晶になつたものであるが、當初オランダ人は此等の道路を原住民に利用する事を禁ずると云ふ横暴の限りを盡したと云ふ。

今次我進擊を受けたオランダは敗走するに當り、並木に爆藥をしかけて道路に横倒し、或は橋梁を破壞する等の妨害工作を施した事は、既に現地よりの報道により知らるゝ通りである。

其の後の模樣に就て、昨年十月二十四日附の現地報告（ジヤカルタ發同盟通信）は次の樣に述べてゐる。

「ジヤワ軍政當局では島内の破壞橋梁の復舊を急いでゐるが、わが建設部隊の活躍と、原住民の協力により工事は著しく進捗、現在までに破壞橋梁の大部分は復舊するに至つた。また當局では橋梁修復の進捗に呼應して破損したまゝ放置されてゐた道路の補修改修工事にも着手してゐる。

戰前ジヤワ島の道路發達は東洋第一と稱せられ、實に四通八達の狀態であつたが、戰爭のため相當損傷し、わが軍進駐後の經濟回復と共に交通の重要性も增してきたので、これに對處するため島内に豐富にある資材を大いに利用して補修に當ることになつたものである。また從來全島の道路は一等路、二等路、三等路と鋪裝の程度によつて階級をつけられ、一等路はバタビア、スラバヤ間の一部、スラバヤ、ジョクジヤカルタ間、バタビヤ附近及びスラバヤ、マラン間だけであつたが、今回現在のバタビヤ、スラバヤ間の鐵道に大體併行してゐる幹線及び北海岸に沿ふチレボン、スマラン間は全部一等路となすべく改裝することになつた。その他の道路に就てもその重要性に應じて改裝を行ふことになつてゐるから、將來ジヤワの道路網は一層完璧となる譯である。」

自動車事情

自動車道路網の發達と共に、昭和三年ジヤワに米國のゼネラルモータースの自動車組立工場が設けられ、月賦販賣が盛んになると共にジヤワの自動車は急速に增加した。

戰前に於ける自動車の總數はオートバイを含み約五萬五千臺の多きを算してゐた。

その内譯は次の如くである。

乘用車	三八、八五五
トラック	五、三〇六
バス	一、五二九
オートバイ	九、六四七

計　五五、三三七

（註、一九三九年一月現在）

舊蘭印の自動車の約七割近くといふものはジャワに集中してゐたのであつて、數的に最も多い自家用乘用車は勿論、鐵道の停車場と遠方の町村間を連絡するバス、大型トラックは至る處疾驅し又雨除けの屋根と腰掛けを備へた五トン積のトラックが盛んに往復し、ジャワ全島を通じ、五日毎に開催されるマーケットに農民とその產物を運搬してゐた。

バスは企業規模は小さいが、華僑經營のバスが發達し、これが鐵道と競爭的立場にあつた。之が對策として鐵道會社に於てもバスの經營を行つてゐた。

蘭印政府はこの鐵道とバスの競爭の弊害を除去せんため、バス營業許可制度を制定施行してゐた。

自動車稅は一九三五年より廢止され、ガソリンに對し消費稅を課してゐた。昭和十六年當時ガソリン一立は二十二仙であつた。（ガソリンは九仙であるが、消費稅が十三仙ついて二十二仙となる）。

從つて、營業用車は漸減の傾向を示してゐた（スラバヤ市內の流しタクシーは小型の歐洲車が多く、市內の相場は二十仙から二十五仙、バタビヤは大型の米國車が多いので相場は高かつた。——昭和十六年當時）

儲て、ジャワに於ける自動車を所有者別にみると次の如くなつてゐた。

所有者別臺數

所有者	乘用車	トラック	バス	オートバイ	計
歐米人	二一、二三七	八九五	一三六	四、六八七	二六、八五五
原住民	一五、五三八	一、一三〇	三、四七五	四、九六四	二五、一〇七
アジア人	一一、三四五	三、九九四	二、九三七	二、一九〇	二〇、四六六
共同所有	五、〇七〇	三、六三六	六六八	一、三九八	一〇、七三二
計	五三、〇九〇	九、六五五	七、二一六	一三、二三九	八三、二〇〇

（註　一九三九年一月現在）

表に見る樣に、ジャワに於ける自動車の三二％强と云ふものはジャワ總人口の二百分の一にしか當らぬ歐米人の所有に歸してゐたのである。

殊に乘用車の四割と云ふものは歐米人の所有であつた。

之に反し、トラック、バスは歐米人の所有少く、原住民及び華僑の手に大半あつたのである。

殊に、華僑のトラック、バス部門に對する勢力は大きなものであつた。又、自動車修理業及び部品販賣業に於ても牢固たる地盤を占めてゐたのである。之は今後我自動車界がジャワ進出に當つて一應頭に入れて置くべき事であらう。

之等ジャワに於て使用されてゐた車はどんな車が多かつたかと

云ふと、大半は米國車であつて、極く少數の歐洲車を見る狀態であつた。米國車が多かつたのは同地のタンジョンブリオクに米國のゼネラル、モータースの工場が設けられてゐたし、他の南方諸地域にも米國系の組立工場が數多く設けられてゐたからである。

然し米國車と云つても、各人好み〳〵に買つてゐたため、種類は非常に多い。戰前の乘用車に就いてみると、九十四種類も使用されてゐた。即ち

フオード	一六%	
シボレー	一五	
ダッヂ	六	
其の他	六三	
計	一〇〇	

と云つた風に雜多であり、トラック、バスも車名別にすると、六十三種類も使用されてゐた。

シボレー	五八%
フオード	一八
ダッヂ	八
GMC	四
其の他	一二
計	一〇〇

と云つた風である。斯樣に多數の種類に亙る事は、部品の補給が厄介であり使用上不得策である。今後は適當に淘汰して行く事が必要であらう。

自動車組立工場としては、前述のゼネラル、モータースの組立工場がジャカルタの傍のタンジョン、ブリオクにあつた。之は皇軍の進擊前に敵側は機械をバンドンに運び去つてしまつてゐたが皇軍上陸後直ちに機械を探し出し、設備を舊に復し、現在ではトヨタ自動車が原住民を使用して押收車の修理を行つてゐる。

タイヤー工場はバイテンゾルグに大規模な工場があり、日本タイヤーが現在委任經營を行つてゐると云ふ。

修理工場としては、ジャカルタ、スラバヤ、バンドン等に相當設備のよいものがある。機械設備の良い點ではマライの修理工場より良いと云はれる。

華僑が經營してゐるものが多く、職工は原住民が多い。

今後、南方に自動車部品工業をおこすとすれば、先づジャワは第一候補地であらう。

從來、蘭印の自動車界を牛耳つてゐた米國勢力も、大東亞戰爭を契機に總退却し、之に代り、ジャワの自動車の指導者たるものは日本を措いて他にない。

從來、ジャワの自動車は發達してゐたと云ふが、その發達も結局歐米人本位のものであつて、原住民の福祉を願つたものではなかつた事に氣がつくであらう。

乘用車のみ跛行的に多い從來の保有形態は當然是正されねばならないであらう。

又、スマトラ、ボルネオ等從來開發を行はなかつた關係から、著しく自動車が少いが、之等の地域とも脱み合はし、今後のジャワの自動車の配分を決定すべきであらう。

いづれにせよ、ジャワの自動車界は新に大東亜的性格に生れ變らねばならない。

石川縣羽咋郡志雄町の道路愛護會作業及展覽會に就いて

木村石川縣土木課長

石川縣羽咋郡志雄町に於ては二十年前道路愛護の必要緊切な事業なるを感得し、町長中村長久を中心に其の作業を開始し漸次附近町村に普及し本年五月に施行したる際の如き富山縣下町村より四十餘人の出動あり、極めて盛大に施行し、道路改良會よりは平井幹事來志せられ小官等亦出張した、尚志雄町に於ける作業及展覽會の狀況の大略を記すれば左の通である、尚ほ閉會式に臨み木村縣土木課長の告諭あり且平井幹事は道路改良會長水野氏の祝詞を代讀された。

志雄町道路愛護會作業

記

一、日時　七月五日午前七時より午後四時迄

二、出場人員　三千三百一名

三、作業實施區間

一、府縣道　六里三十一町

二、町村道　二十二里十六町

三、林　道　四里二十九町